

## 詩・哲学・地政学

— 「夕べの国」をめぐって—

長谷川 晴生（東京理科大学）

### *Dichtung, Philosophie, Geopolitik*

— Über das »Abendland«

Haruo HASEGAWA

Das »Abendland« ist ein Begriff, der nicht nur geographisch, sondern gleichzeitig stark politisiert, d. h. geopolitisch ist, und auf den sich auch die heutige Neue Rechte Deutschlands gern bezieht. Diese Abhandlung behandelt Martin Heideggers Auseinandersetzung mit dem Begriff »Abendland«, mit dem er Friedrich Hölderlins Gedichte zu erläutern versuchte. Die späteren Elegien und Hymnen Hölderlins haben eine wichtige Charakteristik, in der sich die Standpunkte der Dichtungen zwischen »Abendland« (Hesperien), Griechenland und »Morgenland« (Asien) geographisch bewegen. Zuerst verstand Heidegger dieses hölderlinische »Abendland« auf völlig banale Weise nur als *unser* Land, das vom Osten begrenzt wird und gegen den Osten geschützt werden muss. Es gab dennoch einen Wendepunkt um 1940, der anscheinend dadurch verursacht wurde, dass er Friedrich Beißners Entdeckung einer anderen Schrift von „Brot und Wein“ zur Kenntnis nahm. Basierend auf seiner Lektüre dieses neu entdeckten Fragments hatte Beißner behauptet, der deutsche Geist müsse einmal in die „Kolonie“ als Asyl fliehen, da er dort sein Eigenes, »das Nationale« finden könne. Dieses Argument mag Heideggers spätere Vorlesungen über Hölderlin, besonders über »den Ither« beeinflusst haben. Schließlich las Heidegger aus den Dichtungen von Hölderlin eine Art Dialektik heraus, der zufolge der abendländische Mensch sich zuerst im Unheimischen befinden müsse, um das Heimische zu verlangen. Das Unheimischsein sei eine Voraussetzung des Heimischwerdens – dies ist eine Folge der „Geopolitik und Philosophie“, die Heidegger bei Hölderlin fand.

**Schlüsselwörter:** Friedrich Hölderlin, Friedrich Beißner, Geopolitik,  
Abendland, Konservative Revolution

**キーワード:** フリードリヒ・ヘルダーリン、フリードリヒ・バイスナー、  
地政学、夕べの国、保守革命

## 1. はじめに —— 闘争概念としての「夕べの国」

文学と文化史に通暁する社会学者、リヒャルト・ファーマーは、1979年に刊行した——そしておそらく近年の情勢緊迫を鑑みて2020年に増補第三版が出された——『夕べの国——ある政治的闘争概念』のなかで、「夕べの国（Abendland）」こそ20世紀ドイツ語圏の「保守革命」陣営の掲げた「闘争概念」の代表であったと主張している。「ヴァイマル共和国やオーストリア第一共和国における反動的ヴィジョンや保守革命に関係するところでは、夕べの国 - ライヒ - ヨーロッパという三位一体の概念が、常に一つの中心思想になっている<sup>1)</sup>。ファーマーによれば、「夕べの国」は、辞書に掲載されているように、「西洋」を示す単なる中立的な雅称と受け取られてはならない。それが示唆しているのは、敵としての「東方」を名指したうえでの、失われた「ヨーロッパの『統一的伝統』の復古」なのである<sup>2)</sup>。そこでスローガンとなったのは、ギリシア世界から日の沈む西方の土地、ギリシア語で言う「ヘスペリア（Hesperien）」に到来し、のちにヨーロッパ全体を覆うであろう国家を建設したアエネアスを歌う、ウェルギリウスの詩句であるという。

だが、汝、ローマ人よ、秩序のもと諸国民を統治するのを忘れるな。

これは汝の使命なのだ、平和の法を敷いて、

屈服した者を受け入れ、暴慢の輩を破ることは。<sup>3)</sup>

この「ローマ」がカトリック教会、そしてそれを守護するとされた神聖ローマ<sup>ライヒ</sup>帝国と解釈され、ロマン派以降の近代を通じて徐々に「夕べの国」はドイツを中心としたヨーロッパ新秩序の構想と強く結びついていく。そのなかで、（神聖ローマ帝国を直接的に継承する）オーストリアとプロイセン、カトリックとプロテスタント、ひいてはキリスト教とゲルマン異教主義、こうした対立はすべて解消されてしまう。「西」である「夕べの国」が対峙しなければならない「東」も、教会分裂後の正教会圏からソヴィエト連邦のボルシェヴィズムを経て昨今のイスラームへと、状況に応じて融通無碍に姿を変える。かくして「夕べの国」は、「反共産主義、反社会主義のみならず、反民主主義、反リベラリズムの性格を与えられる。そして、さまざまな場合ごとに、権威主義からファシズムまでの、エリート主義から身分制までの、教会から新異教主義までの、そして最終的には帝国主義の刻印を受ける<sup>4)</sup>。ファーマーの卓抜な言い方を借りれば、「夕べの国」は、「人文主義的アンチヒュー

<sup>1)</sup> Richard Faber, *Abendland. Ein politischer Kampfbegriff*, 3. Aufl., Hamburg 2020, S. 20.

<sup>2)</sup> Ebenda. なお、「闘争概念」の出典はカール・シュミットの『政治的なものの概念』であり、ある具体的状況のもとで敵を攻撃して友を結集させるべく、旗印として掲げられる特殊な語を意味している。シュミットの挙げているわかりやすい例は、「階級」や「計画経済」などである。Vgl. Carl Schmitt, *Der Begriff des Politischen. Text von 1932 mit drei Corrolarien*, Berlin 1963, S. 31. [カール・シュミット、菅野喜八郎訳「政治的なものの概念」『カール・シュミット著作集 I 一九二二 - 一九三四』、慈学社出版、2007年、258頁]

<sup>3)</sup> Verg. Aen. VI. 851-853. [ウェルギリウス『アエネーイス（上）』泉井久之助訳、岩波文庫、1976年、420頁]

<sup>4)</sup> Faber, *Abendland*, S. 10.

マニズム (humanistischer Antihumanismus) <sup>5)</sup> にとっての「マジックワード (Zauberwort) <sup>6)</sup> となったのであった。

ファーバーが「タベの国」をめぐる「人文主義的アンチヒューマニズム」の例として挙げている「重要な名前」は、ルドルフ・ボルヒャルト、エルンスト・ローベルト・クルツィウス、T・S・エリオット、フーゴー・フォン・ホフマンスタール、カール・シュミット、オスヴァルト・シュペングラールである<sup>7)</sup>。しかし、ここで敢えて避けられている、やはり「重要な」と呼んで差し支えないであろう名の存在には、容易に気づくことができよう。すなわち、マルティン・ハイデガーである。ハイデガーもまた、特に 1930 年代以降の著作や講義のなかで、「タベの国」概念を多用した哲学者にほかならなかったからである。

『タベの国 ——ある政治的闘争概念』の著者がハイデガーを同書での対象から除外した理由については、もとより推測するほかない。一つ考えられるのは、ハイデガーは「タベの国」を「政治的闘争概念」としては掲げなかった、と見なされたことであろう。確かに、「ハイデガーと政治」に関する文献は汗牛充棟の様相を呈しているにしても、それはあくまでも彼の国民社会主義への加担や反ユダヤ主義への傾倒に集中して向けられている。その視点のみからすれば、ハイデガーによる「タベの国」への言及は、脱政治的な、少なくとも非政治的なものとされてもやむを得ないだろう。というのは、ハイデガーのなかで「タベの国」が浮上したのは、ナチス体制との衝突のもと 1934 年にフライブルク大学の学長職を解かれたのち、フリードリヒ・ヘルダーリンの詩作品に取り組んでいく過程だったからである。とはいえ、ファーバーの言うように「タベの国」自体が極めて強い政治的負荷を与えられた言葉である事実を念頭に置くとき、この概念に即して、いわばポスト・ナチス段階のハイデガーの政治性を新たに再検討する余地が生まれよう。そのとき注目に値するのは、ハイデガーに「タベの国」を思索させる契機となったのが、ほかならぬヘルダーリンであったことである。ヘルダーリンこそ政治的な——それも「地政学」的な——詩人ではなかったか。

## 2. ヘルダーリンの「地政学と歴史哲学」

フリードリヒ・ヘルダーリンの長篇小説『ヒュペーリオン』(1797 年/1799 年) をテーマとして、フリードリヒ・キットラーのもとで博士号を取得したドイツ文学研究者、クリストフ・アルブレヒトは、同論文をその名も『地政学と歴史哲学 ——1748 年～1798 年』と題して出版している。アルブレヒトによれば、歴史哲学も地政学も、いずれも 18 世紀のフランス啓蒙思想に起源を持つ発想である。前者の発端がヴォルテール『歴史哲学』(1765 年) であることはよく知られている。一方、後者は、確かに「地政学 (Geopolitik)」なる用語それ自体が登場するのは 19 世紀後半のドイツであるものの、地理的条件と国際政治の

<sup>5)</sup> Ebenda, S. 11.

<sup>6)</sup> Ebenda, S. 14

<sup>7)</sup> Ebenda, S. 11. なお、通常『西洋の没落』と日本語訳されているシュペングラールの主著は、正確には『タベの国の没落』である。

分析を関連づけ、そこから国家がとるべき政策を導き出そうとする思考は、元来は単に「政治的地理学 (géographie politique)」と呼ばれており、もとをたどれば重農主義の経済学者、ジャック・テュルゴーに行きつくという<sup>8</sup>。

アルブレヒトはさらに、地政学と歴史哲学は理念型として関係が深く、相互補完的であると主張している。「地政学は、可能な政治行動がグローバルな地理条件に制約されていることを探求しようとする。歴史哲学は、『歴史の発展法則』なるものを描き出そうとする。これら両者の思考法は、その歴史的起源からして相互に結びついている。また、実践的な政治行動という意味でも、両者を分離するのはしばしば困難である。軍事行動は地政学的に計画される。しかし、同時に、そのためのプロパガンダとして、歴史哲学のつくり出した諸概念——『国民』、『自然国境』、『自由』、『人種』、『文明』、『人類』といった——が持ち出される。[.....] 歴史哲学による暗示は、単に恣意的な軍事侵攻を、歴史や政治にとって必然的であると思わせ、正当化するのである<sup>9</sup>。

アルブレヒトがこのような視点を用意したのは、彼の元来の分析対象がヘルダーリンの『ヒュペーリオン』だったからである。『ヒュペーリオン』は、ギリシア人のオスマン帝国に対する蜂起を主要な背景としている<sup>10</sup>。当時「東方問題 (orientalische Frage)」の名のもとに叫ばれた、ボスポラス海峡の此岸であり地理的にヨーロッパであるバルカン半島からイスラーム教徒の支配を駆逐しようとする計画は、まさに先の引用にあるように、ヨーロッパ「文明」に属する「国民」の「自由」を取り戻すものとして、地政学と歴史哲学の双方から正当化されていたのである。特にギリシアに関しては、そこがヨーロッパの「文明」や「自由」の発祥の地とされるだけに、いっそうその傾向が強かったといえよう。

しかし、ここで見落としてはならないのは、『ヒュペーリオン』にとどまらず、ヘルダーリンの全作品に「地政学と歴史哲学」の刻印が色濃く表れているところである。同小説の刊行された1799年以降に「悲歌」や「讃歌」として書かれ、今日でも彼の代表作と目されている一連の詩作品が、特にそれに該当している<sup>11</sup>。これらヘルダーリンの後期作品を読む者が気づくのは、作中のナラティブが地理的に移動してゆく特徴が強く表れていることである。そして、ひいては、一方では「西」、まさに第1章で見てきた意味での「タベの国 (Hesperien ないし Abendland)」であるドイツや西ヨーロッパと、文明の起源たるギリシア世界との、のみならずその背後に広がる中東からインドにまでいたるオリエント世界とのあいだの境界確定を行いながら、他方では両者の結びつきを歌いあげようとする強固な意志が介在していることである。

具体例に即して見てみよう。「パンと葡萄酒 (Brot und Wein, 1800年/1801年)」は、第

<sup>8</sup> Christoph V. Albrecht, *Geopolitik und Geschichtsphilosophie 1748-1798*, Berlin 1998, S. 24. 該当するテュルゴーの作品としては、1748年の「なすべき著作のリスト (Liste d'ouvrages à faire)」、1751年の「政治的地理学に関する著作計画 (Plan d'un ouvrage sur la géographie politique)」などが挙げられている。

<sup>9</sup> Ebenda, S. 25

<sup>10</sup> ただし、同小説で扱われているのは、刊行年からも明らかなように、いわゆるギリシア独立戦争 (1821年)ではなく、結果として失敗に終わった「オルロフ反乱 (1770年)」である。

<sup>11</sup> 以下、ヘルダーリンの詩は、ドイツ古典作家叢書の作品集 (Friedrich Hölderlin Sämtliche Gedichte, hrsg. von Jochen Schmidt, Frankfurt am Main 2005) を底本として参照する。本文中で引用する際は略称をHSGとして、頁数を併記する。

1 聯ではドイツ都市の夜景から歌い起こされながら、第 3 聯で「ゆえにイストモスに來たれ！（HSG, 287）」の句とともに場面をギリシア世界へと移し、やがて酒神ディオニュソスが登場したあと、ふたたびその舞台をドイツへと戻す。

彼（引用者注——酒神）はここにどまり、過ぎ去った神々の名残を、  
暗闇に生きる神なき者たちに伝える。  
古人の歌が予言した神の子ら、  
見よ！ それは我ら、夕べの国（Hesperien）の果実なのだ！（HSG, 291）

「帰郷（Heimkunft, 1801 年）」では、冒頭でアルプスの山々が描写されたのち、ライン川の流路に従って視点が移動し、ボーデン湖を経て詩人自身の故郷であるネッカー溪谷へといたる。「漂泊（Die Wanderung, 1801 年）」は、視点移動の点では「パンと葡萄酒」に近い構造を持っており、まず「浄福なるスエヴィア（HSG, 324）」、つまり詩人の故郷であるシュヴァーベン地方にはじまり、唐突に「私はカフカスを目指そう！（HSG, 325）」と言われ、ドイツ人の祖が黒海のほとりで「太陽の子ら（同）」と出会って混交したという典拠不明の神話が語られ<sup>12</sup>、やはりギリシアに赴きながら「だが私は長居はしまい（HSG, 327）」とドイツに帰還する。「ゲルマーニエン（Germanien, 1801 年）」は、今度はギリシアから語り起こされ、ゼウスの使いたる鷲がイタリアとアルプスを越えてゲルマニアの地に飛来する。「回想（Andenken, 1803）」は、作者が家庭教師として滞在していたことのあるボルドーから開始され、ガロンヌ川に吹く北東の風とともに、南仏からインドへと船出する詩である。こうした例は枚挙にいとまがない。

この性格が最も強く表れているのが、川を題名とした一連の詩作品にほかならない。国家や地域のあいだの境界をなし、しかも水源から海にいたるまで複数の国々を流れてゆく川こそ、上で見てきたようなヘルダーリン特有の詩の構想にふさわしかったといえる。「ネッカー（Der Neckar, 1800 年）」は、詩人の故郷を流れるネッカー川から歌いはじめながらも、やがてライン川と合流するところまで行くと、第 4 聯の「私には世界は美しく思える。目は飛んでいく／大地の魅力を求めて（HSG, 244）」の詩句を皮切りに、舞台がギリシア世界へと切り替わってそのまま終わる。「ドナウの源泉にて（Am Quell der Donau, 1801 年）」の語り手は、やはり詩人の故郷に近いドナウ川の水源地方にいながら、

言葉は東方から我らのもとに來た。  
バルナツソスの岩山で、キタイロンの山中で、私は聞くのだ、  
おお、アジアよ！ 汝のこだまを [.....]（HSG, 322）

と述べたのち、川の下流に広がるギリシアとアジアへと想像力を羽ばたかせる。

<sup>12</sup> ヨッヘン・シュミットによれば、この部分は、黒海東岸のコルキス人はエジプト起源であるとのヘロドトスの証言をもとに、北方人（のちのドイツ人につながる）と南方人の遭遇からギリシア人が生まれたとするヘルダーリンの認識を示している可能性があるという。Vgl. Hölderlin Sämtliche Gedichte, S. 850.

「川の詩人」たるヘルダーリンの二大代表作が「ライン（Der Rhein、1801年）」および「イスター（Der Ister、1803年）」であることは、衆目の一致するところであろう。「ライン」の冒頭では、詩の話者である「私」はアルプスの森に座っているが、すぐに魂を「イタリア」や「モレア」（ペロポネソス半島の意）へと飛ばしてしまう。そこで聞くのが「若者が救いを求めて嘆く（HSG, 328）」声であり、この「若者」がライン川である。ここで場面は転換し、独特の調子でライン上流の地理的環境が語られる。

その声は、川たちのなかでも最も高貴な者、  
生まれながらの自由人たるラインのもの。  
ラインは、山上では兄弟であった  
テッシンやローヌとは望みを異にして、  
別れてさまよおうとした。その王者の魂はついにラインを、  
止みがたくアジアへと駆り立てた。  
しかし、この願いは無思慮であったのだ、  
運命を前にしては。（HSG, 329）

このくだりは、表面的に読めば、アルプス山中のトーマ湖から発したライン川が、南に向かうティチーノ川（テッシン川）や西に赴くローヌ川と別れて、いったんは東流するものの、すぐに北のドイツの方角に向きを変えろという、単なる地誌を説明しているにすぎない。とはいえ、東への流れをわざわざ「アジアへと駆り立てた」と表現するのは、すでに「地政学と歴史哲学」の圏域である。後段では、北上するにいたったライン川がドイツの国土を潤す様子が寿がれるものの、

だが、一度たりとも、一度たりとも、ラインは忘れないのだ。  
住む家は消え失せるだろう、  
そして掬も人間たちの生きる日も、  
幻影となろう、  
もしラインがおのれの根源を、  
若き日の純粋な声を忘れようものなら。（HSG, 330）

と、詩は当初の東流、アジアへの衝動をふたたび思い起こさせている。

「イスター」とは、ギリシア語でのドナウ川下流の呼称に由来している。ごく常識的な地理情報でいえば、ドナウ川はドイツの黒い森シュヴァルツヴァルトに端を発し、そのまま東流し、東欧諸国を横断して黒海に注ぐ河川である。しかし、ヘルダーリンは、詩をこうはじめている。

我らが歌うのは、しかし、インダスより  
はるかに到来し、アルフォイスを通り  
過ぎてきたもの。ながらく我らは

ふさわしいものを求めてきたのだ。

[.....]

この川こそイスターと呼ばれる。(HSG, 362)

「インダス」はむろんインド西部の川であり、「アルフェイオス（アルフォイス）」はオリュンピアを流れるペロポネソス半島の川であるため、ここで描かれているのは明らかに東から西への移動である。それを敢えて、ヘルダーリンは「この川こそイスター」としている。さらに詩の後半部では、より露骨に「逆流」が言われている。

イスターは、だが、ほとんど  
逆に流れているように見えるのだ。  
思うに、イスターは、  
東方から来ているに相違ない。  
多くのことが  
これについて言い得よう。(HSG, 363)

「ライン」で強調されたのが「西から東」であるとすれば、「イスター」では反対に「東から西」の方向に注意がうながされているのである。

### 3. タベの国、ギリシア、アジア

このように後期ヘルダーリンが執拗に「タベの国」、ギリシア、アジアをめぐる地政学的認識を作品化していたことについては、研究史の初期から、一定の注意が払われてきた。とはいえ、当初は極めて単純化された見方が示されていたにすぎなかった。この段階を代表するのは、ヘルダーリンの伝記作者であったヴィルヘルム・ミヒェルである。ミヒェルによれば、ある時期までのヘルダーリンはギリシアの遺産——芸術、詩、哲学、神々の世界——を直接的に継承すべき模範と考えていたものの、ピンダロスやソポクレスの翻訳を行う過程で「ギリシアとタベの国の存在条件の差」に気づき、その構想を断念してみずからの祖国を歌うようになったという<sup>13</sup>。ミヒェルはこれを「タベの国的転回 (abendländische Wendung)」と名づけている<sup>14</sup>。第2章で見てきた作品の多くに含まれる、はじめは想念をギリシアやアジアに飛ばしつつも最終的には祖国に回帰している構成は、あるいはより直接的な「だが私は（引用者注——ギリシア世界に）長居はしまい (HSG, 327)」といった詩句の存在は、ここから説明されることになる。

しかし、「タベの国的転回」だけでは理解しがたいのは、結局のところヘルダーリンが最後まで——精神に異常をきたす以前の詩人が完成させた最終作品は「ムネモシュネー

<sup>13</sup> Wilhelm Michel, Friedrich Hölderlin. Eine Biographie (1940), Hamburg 2013, S. 331-333.

<sup>14</sup> Wilhelm Michel, Hölderlins abendländische Wendung, Weimar 1922.

（Mnemosyne, 1803年）」とされる——ギリシアを「も」題材とし、時としてはアジアに「も」言及するのをやめなかった事実である。ミヒェルに論駁しつつこの点を突き詰めたのは、ノルベルト・フォン・ヘリングラートに次ぐヘルダーリン全集の編者として知られるフリードリヒ・バイスナーの1933年の著書『ヘルダーリンのギリシア語翻訳』、ことにその第7章に置かれた論考「ギリシアとタベの国（Griechenland und Hesperien）」である。「ギリシアとタベの国」は、ヘルダーリンによるピンダロスやソポクレスの翻訳の試みを扱った本書の大部分からはなかば独立しており、それ自体が一つの論文と読みうるものとなっている。

バイスナーも、ヘルダーリンが現代を「古代世界の直線的な後裔」とする観念を抱いてきたにもかかわらず、1800年前後にそれを放棄したこと自体は認めている<sup>15</sup>。そこで傍証として引き合いに出されるのは、よく知られた1801年12月4日付のカシミール・ウルリヒ・ベーレンドルフ——詩人の友人——宛ての書簡である<sup>16</sup>。

国民固有のもの（das Nationelle）を自由に使いこなすことこそ、我々にとって最も難しい。思うに、我々ドイツ人に叙述の明快さがもともと身につけているのと同じく、ギリシア人には天上の炎（Feuer vom Himmel）が本来的に備わっている。だが、だからこそギリシア人は、ホメーロスのように冷静沈着な叙述能力に優れる代わり、君のようなドイツ人の持っている情熱に負けてしまうのだ。これは逆説的に聞こえるがね。<sup>17</sup>

ギリシア人の本性は情熱（「天上の炎」）である、だから彼らは自分たちにはない冷静な叙述力を学んでホメーロスのような作品を残せた、しかし元来の本性である情熱は向上させ得なかった、「国民固有のものを自由に使いこなす」のは難しいから——この「逆説」を簡潔にまとめると、以上の通りである。ヘルダーリンによれば、ギリシア人とそっくり立場が入れ替わるのがドイツ人である。ドイツ人にとっては、その本性である冷静な叙述力——書簡の後段で「タベの国の、ユーノーのような素面状態（abendländische Junonische Nüchternheit）<sup>18</sup>」と規定されている——の発揮こそ至難であり、そのためにギリシア人からの学習が必要なのである。ここで示唆されているのは、ドイツを単なるギリシアの後裔とする思考を捨てたのちのヘルダーリンも、ミヒェルの主張とは異なって、ギリシアか「タベの国」かという二者択一には立っていないことである。

19世紀以降のヘルダーリンにとっての「タベの国」およびギリシアの位置づけを決定的に語る詩句としてバイスナーが持ち出すのは、ヘリングラート版全集には収録されていなかった「パンと葡萄酒」の後年の異稿である。というより、この部分をはじめて紹介したがゆえに、『ヘルダーリンのギリシア語翻訳』が名高いのだといってもよい。このくだりは、まさに次の第4章で扱うハイデガーはじめ、幾人かの哲学者の興味を喚起するにいたる。

<sup>15</sup> Friedrich Beißner, Hölderlins Übersetzungen aus dem Griechischen, 2. Aufl., Stuttgart 1961, S. 151.

<sup>16</sup> Ebenda.

<sup>17</sup> Friedrich Hölderlin Sämtliche Werke Bd. 9, hrsg. von D. E. Sattler, München 2004, S. 183.

<sup>18</sup> Ebenda.



そうなのだ、精神が家にあるのは、  
元初のことでは、起源のことではないのだ。故郷は精神を食らい尽くしてしまうから。  
精神は植民地を愛し、そしてさらに勇敢にも忘却を愛する。  
我らの花々は、我らの森の木陰は楽しませる、  
やつれ果てた者を。魂を与えるこの者は、あやうく焼き尽くされる場所だったのだ。  
(HSG, 747)<sup>19</sup>

バイスナーによれば、遺稿の意味はこうである。——精神は、元初においては故郷にとどまり得ない。「故郷は精神を食らい尽くしてしまうから」である。精神は、一度はアジールとしての異郷、「植民地」に逃れなければならない。しかし、かといって異郷にあり続けるは、精神は衰弱するほかない。だから、やがて時が到来し、故郷の力への抵抗力が十分に身についたとき、精神は帰郷しておのれ自身の花々や森を求めるのである<sup>20</sup>。

バイスナーは、この「パンと葡萄酒」異稿を、先に挙げたベーレンドルフ宛書簡の認識を作品化しようと試みたものと理解している。書簡では、ドイツ人にとっての「国民固有のもの」である「タベの国の、ユーノーのような素面状態」は、ギリシア人の本性たる「天上の炎」——むろんアポロンの属性である<sup>21</sup>——を学び取ることによってしか開花させ得ないとされていた。一方、こちらでは、ドイツ人はいったん異郷、「植民地」としてのギリシアに迂回しなければ国民形成できない、というかたちで同じ内容を示しているのである。ゆえに、ミヒェルの言うのとは逆に、「ギリシアはヘルダーリンのなかで死んではいない。むしろ、若きタベの国の精神にとって不可欠な植民地となっている<sup>22</sup>」。

さらに、バイスナーの論考は、ヘルダーリンにとっての「タベの国」とギリシアのみならず、アジア、「朝の国 (Morgenland)」の位置づけにも踏み込んでいる。バイスナーによれば、「ドナウの水源にて」、「回想」、そして「ライン」や「イスター」に見られるような、ヘルダーリンの作品での「朝の国の浮上」は、「タベの国」への取り組みと矛盾するものではない。むしろ、ドイツ人が「国民固有のもの」をあらためて確立するために奪取しなければならないギリシアの「天上の炎」にとっての故郷がアジアなのであり、「タベの国」のために「朝の国」の力が必要なのである<sup>23</sup>。

#### 4. ハイデガー —— 詩、哲学、地政学

ハイデガーはヘルダーリンを読み込む過程で、いわゆる「ナチス加担」とは別次元の政

<sup>19</sup> バイスナーによる初出は Ebenda, S. 147 であり、「パンと葡萄酒」の 152 行目から 156 行目に代わるべき異稿とされている。なお、ドイツ古典作家叢書版作品集の編者であるヨッヘン・シュミットによれば、作品成立（1801 年）の「数年後」の異稿とのことで（HSG, 747）、正確な執筆年は不明である。

<sup>20</sup> Beißner, Hölderlins Übersetzungen aus dem Griechischen, S. 148.

<sup>21</sup> Ebenda, S. 160.

<sup>22</sup> Ebenda, S. 162.

<sup>23</sup> Ebenda, S. 164.

治性に、それも「タベの国」をめぐる地政学的な意味での政治性へと深入りしていったのではないか——冒頭で示した本稿のこの問いにとって鍵となるものの一つがあるとすれば、バイスナーの上記の発見ではないかと思われる。

まず、時系列を整理しておこう。前述の通り、ハイデガーは、総長解職後の1934年／1935年の冬学期に講義『ヘルダーリンの讃歌「ゲルマーニエン」と「ライン」』（GA39）にてこの詩人を取り上げはじめ、1936年には「ヘルダーリンと詩作の本質」（GA4 所収）と題して講演をしている<sup>24</sup>。取り組みは1940年前後にふたたび活性化し、1939年／1940年には講演「あたかも祝日のように」（GA4 所収）が、1941年／1942年には講義『ヘルダーリンの讃歌「回想」』（GA52）が、1942年／1943年には講義『ヘルダーリンの讃歌「イスター」』（GA53）が矢継ぎ早に行われ、1943年には論文「回想」（GA4 所収）も発表されている。戦後にも関心は継続し、1959年には講演「ヘルダーリンの大地と天」（GA4 所収）がなされている（ほか、未公刊の小品を集めたGA75『ヘルダーリンに寄せて』が存在する）。

これらを順に追ったとき浮上するのは、『「ゲルマーニエン」と「ライン」』に代表される30年代中葉の議論のなかでは、ハイデガーがいまだに通俗的な「地政学と歴史哲学」の認識にとどまっていることである——ハイデガーは、ヘルダーリンがドイツ（「タベの国」）、ギリシア、そしてアジアの境界確定を試み、そのうえでこれらの場所を関連づけようとしていたのを承知していたはずなのに。その典型例は、アジアについての位置づけに見られる。「ライン」講義では、第1聯に登場する「運命（Ein Schicksal, HSG, 328）」について、次のように言われている。

アジア的な運命の観念は、ヘルダーリンの思索のなかでは創造的に克服されている。このアジア的な宿命の最初の、そして同じやり方では二度と行われ得ない克服は、ギリシア人によって、それも同民族の詩作と思索と国家創造と同時になされたのであった。（GA39, 173）

これはありふれた西洋哲学史のアジア観であり、ヘルダーリンもそれを踏襲していた、という読み方にすぎない。また、アジアを「克服」したはずのギリシア人にしても、ドイツ人と「同系の民族」とされながらも、もはや戻り得ない「東」として位置づけられている。

元初、東の方に向かおうとしていたライン川は、突如として今日のクール市の近くで方向を北に転じ、ドイツの国土へと向かう。この断折は根源にあったときから衝動的意志のうちにあったもの、すなわち東への衝動からの突然の離反である。[.....] ギリシア人自体、（引用者注——ドイツ人と）同系の民族であり、根源的な者が駆り立てられる根源への同じ原衝動、同じ存在への原衝動を内蔵している。[.....] しかし、今日の歴史的現存在は、川がその源泉に戻り得ないのと同じように、もはやこの民族に戻ることはできない。（GA39, 204-205）

---

<sup>24</sup> 以下、ハイデガーの論文や講義は、ヴィットーリオ・クロスターマン社の全集（Martin Heidegger Gesamtausgabe, Frankfurt am Main 1975-）を底本として参照する。略称をGAとして、巻数と（必要なら）頁数を併記する。

第2章で特に取り上げた「ライン」の特異な詩句「その王者の魂はついにラインを、／止みがたくアジアへと駆り立てた」も、「東への衝動からの離反」こそ「タベの国」をつくるという文脈に回収されてしまう。

状況が変化を見せはじめるのは、40年代に入ったのちである。そして、本稿にとって興味深いのは、1940年前後のこの時点で、ハイデガーがバイスナーの紹介した「パンと葡萄酒」異稿をあらためて認知した、少なくとも重視しはじめた形跡があるところなのである。ハイデガーが「パンと葡萄酒」異稿に言及したのは、「回想」講義のことである（GA52, 189）。ただし、すでに学期の後半に達していた事情も手伝って、本格的な考察は翌年の「イスター」講義に持ち越される。

「イスター」講義は、ハイデガーの授業の常として、必ずしも表題の詩のみを扱っているわけではない。もちろん基本的には「イスター」をベースとしながらも、その関連で、第二部ではヘルダーリンの翻訳していたソポクレス『アンティゴネー』に焦点が当てられ、第三部ではいよいよ「パンと葡萄酒」異稿が大きく扱われる。その際、ハイデガーは次のように述べている。

この詩行は、Fr・バイスナーの著作『ヘルダーリンのギリシア語翻訳』（1933年）の147頁にて、はじめて公表されている。この注意深い文献学の業績は、ヘリングラートの1910年の問題設定をふたたび取り上げ、個々の点ではいくつかの改善をもたらしている。ヘルダーリンの詩や草稿のテキストを確定しようとするバイスナーの試みは、必要不可欠であり、いかに高く評価してもしすぎることはない。しかし、同時に解釈を必要としている。（GA53, 156-157）

バイスナーの単なる文献学的業績に哲学者たる自分が解釈を与える——と読まれたげな宣言に反して、しかし、「イスター」講義はあくまでも、「パンと葡萄酒」異稿をベーレンドルフ宛書簡と関連づけるところまで含めて、第3章で見てきた「ギリシアとタベの国」の路線に即して行われているとあってよい。すなわち、異郷へと迂回してはじめて故郷に到達しうる精神という、ある種の弁証法的な構図である。

ハイデガーの言葉に即せば、「いまだ解放されざる固有のもの」である「故郷」は、「精神を食らい尽くしてしまう（GA53, 163）」ゆえに、「精神の本性は異郷的（unheimisch）」であり、おのれにとって固有のものを得るためにこそ、「異郷的なもの、異国的なもの」を欲する。これが「精神は植民地を愛し、そしてさらに勇敢にも忘却を愛する」の真意である。一方、「植民地」は単なる異国ではなく「母の国へと回帰する娘の国」であり、植民地にある精神は常に母を求める（GA53, 164）。こうして、精神は植民地なる異郷を経由してはじめて、「我らの花々は、我らの森の木陰」へと、つまり「ドイツのもの、土着的なる（einheimisch）もの」へと帰還する契機を手にする（GA53, 167）。

ヘルダーリンは、この「異稿断片」のなかで、歴史的かつ詩人的に、ドイツ人の歴史に対して語っているのである——異郷にあることこそ故郷に向かうことにほかならない、という法則を。（GA53, 168）

最終的に、バイスナーに触発された異郷と故郷の弁証法の導入を通じて、「イスター」の詩句「イスターは、だが、ほとんど／逆に流れているように見えるのだ。／思うに、イスターは、／東方から来ているに相違ない」にも、かつての「ライン」講義での「東への衝動からの離反」とはまったく異なった解釈が与えられることになる。

イスターは根源の近くに住んでいる。それは、異国へのさすらいを終えて、現在の場所へと帰郷したためなのである。つまり、イスターは、異郷にあることこそ故郷に向かうことである、という例の法則を満たしているのである。（GA53, 202）

## 5. おわりに

### ——「ハイデガーとナチズム」から「ハイデガーと保守革命」へ？

ハイデガーは、ヘルダーリンを読解しはじめた当初は、彼の詩におけるドイツ、ギリシア、アジアの境界確定に力点を置いており、「夕べの国」を「東」から分離して「東」と対峙させようとする意味で、伝統的な地政学的認識の枠内にとどまっていた。しかし、徐々に取り組みが進捗するなかで、おそらくはバイスナーの「パンと葡萄酒」異稿への注目を媒介として、ドイツ人は異郷としての「東」へと迂回してはじめて故郷に向かうことができるという、新たな「法則」を見いだすにいたる。この場合、異郷たる「東」には、ギリシアもアジアも含まれうる。戦後のハイデガーが「ヘルダーリンの大地と天」でギリシアを「朝の国内的な場所（das Morgenländische）」と呼ぶのも、その延長にあるといえよう（GA4, 157）。

このハイデガーの転身は、<sup>ナチズム</sup>国民社会主義の呪縛からの完全な脱出であり、第1章で概観したリヒャルト・ファーマーの言う「夕べの国」をめぐる「人文主義的アンチヒューマニズム」からの離脱なのであろうか。現代風に言い換えるならば、「東」を敵視したり蔑視したりするのをやめる、politically correctな動きなのであろうか。

しかし、結論はそう単純ではあるまい。ファーマーの仕事を引き継ぎ、現代のドイツの新右翼にとっての「夕べの国」神話を再構成してみせた思想史家、フォルカー・ヴァイスは、その著書に「東方の『夕べの国』？」と題した節を設けている。ヴァイスによれば、ドイツの民族主義は、みずからを「西」としたうえで「東」と敵対してきただけでなく、実にご都合主義的に、場合によっては自身を「東」に位置づけて西方の勢力——ヴェルサイユ体制、フランス的共和政、アングロ・サクソンのリベラリズム、ひいてはアメリカニズム——と闘争しようとしてきたという<sup>25</sup>。「夕べの国」の原義が「日の沈む西方」であったとしても、もともと極めて恣意的な使われ方をしてきた概念なのである。

ヴァイスが強調しているように、いまこうした融通無碍な「夕べの国」観を全面展開している新右翼は、<sup>ナチズム</sup>国民社会主義ではなく、「保守革命（Konservative Revolution）」陣営——

<sup>25</sup> Volker Weiß, Die autoritäre Revolte: Die NEUE RECHTE und der Untergang des Abendlandes, Stuttgart 2017, S. 182-183. [フォルカー・ヴァイス『ドイツの新右翼』長谷川晴生訳、新泉社、2019年、270～271頁]

エルンスト・ユンガーの私設秘書であった評論家、アルミン・モーラーが、主著『ドイツにおける保守革命』によって提唱した思想史的カテゴリーで、戦間期の非ナチス（とされる）右翼思想家の総称——の後継者を自任している。その文脈で礼賛されているのが、ユンガーやカール・シュミットに加えて、ほかならぬハイデガーである。つまり、ハイデガーは、かつてヴィクトル・ファリアスらが喚起した問題設定をかわすかたちで、国民社会主義者から離反したがゆえに安心して参照できる人物であるというエクスキューズのもと、新右翼に愛読されているのである。

「ハイデガーとナチズム」から「ハイデガーと保守革命」へ。仮に、ハイデガーと政治をめぐる問いの方向性が次第にこう転換するとしたら、ヘルダーリン読解の進展に際して彼が見せた、「タベの国」の立場での「東」への接近と「西」からの離脱は、ふたたび危いアウラを身にまとわざるを得ない。ヴァイスは、ハイデガーを引用して賛意を表す、若手の新右翼たちの著書を紹介している。果たして、そこで引かれているものこそ、本稿で見えてきた「イスター」講義の一節なのであった<sup>26</sup>。

今日、我々が知っているように、アメリカニズムなるアングロ・サクソン世界は、ヨーロッパを、つまり彼らの故郷を、つまりタベの国の元初を抹殺しようと決意した。元初のものには破壊しえないというのに。今次の惑星的戦争に対するアメリカの参戦は、彼らの歴史への参入ではなく、アメリカ的歴史喪失とアメリカ的自己破壊の最後に位置するアメリカ的行動にほかならない。というのは、かかる行動は、元初的なものの拒絶であり、元初なきものへの決断であるからである。

(GA53, 68) <sup>27</sup>

<sup>26</sup> Ebenda, S. 115. [『ドイツの新右翼』168頁]

<sup>27</sup> この部分がいかに1942年から43年にかけての冬学期の講義にふさわしい単なる時事的な言及にとどまらないのは、例の「異郷にあることこそ故郷に向かうこと」という法則を踏まえたうえで、その「異国のものを拒否し、あまつさえ抹殺する (GA53, 68)」事例として取り上げられているところからも明らかである。